

平成三十年度 入学試験問題 国 語

文・教・経・医―医 二月二十六日(月) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十一ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、文学部・教育学部・経済学部と医学部医学科志望者は、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所受験番号を記入せよ。
- 7、理学部志望者は、答案紙の所定の二箇所に受験番号を記入せよ。
- 8、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 9、問題冊子の余白は草稿用にしてもよい。
- 10、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 11、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

文字のない世界において、なにごとかメッセージを伝えたり注意を喚起したりするには、「音」と「声」が不可欠であったろう。洋の東西を問わず、前近代社会においては、コミュニケーションは音と声（と身振り）によってなされた。文字がごく一般に使われるようになり、読み書きが普及した近現代においても、音と声による伝達は、たとえその性格を変えたとしても重要性は相変わらずである。

A それらは、メッセージを伝えるためだけにあるのではなく、しばしば特別な情動的価値をもつて作用してきた。各時代・地域の人びとが、身の回りの音や声を聴いて、世界や自分をどう感じ理解していたのか、その様態は歴史の進展とともに変化していこう。是非とも過去の世界の音や声の意味と効果を蘇^aらせてみたいものだ。

B 音や声は、その場で発せられると後には何も残らない。音も声もその本質からして、儚^{はかな}く、生まれたとたんになくなっていく。文字や印で書き留められないかぎり、それを再現する手段は、人びとの記憶の中にしかない。

C こうした音や声の世界は、歴史学の課題のなかでも一番ヤツカイな部類に属する。史料といえば羊皮紙や紙に文字で書かれており、現今流行の図像史料や考古学的遺物にしても、視覚と触覚に訴えることはあっても、そこから聴覚に響く音や声は聞こえてこない。だから私たちとしては、文字に記された音・声関連の情報をもとに、音響の想像空間を作り上げるしかないのだろうし、政治・経済・社会・文化・宗教など、領域横断的に音・声の行方を追いかけて、過去の人びとの音のコミュニケーションあるいは集合的な記憶の世界に入り込んでみる蛮勇^①が必要だろう。ただし、例外的に声^aが聞こえる文書史料が残っていることもある。たとえばそれは、聴衆への呼びかけ、擬声語、擬態語、地口、脱線にいたるまで細大漏らさず記述して、アルファベットによる声再現の限界にイド^cンでいる一五世紀イタリアの説教筆録のような史料である。

鉄道や自動車がまだなかった産業化以前の時代においては、農村や森林などの自然の景観が優勢なところは勿論、人の集合した都市でさえ、恒常的な騒音が少なく、まことに静かだったことだろう。とりわけ夜のしじまは、相当なものであったと推測できる。そうした静謐^{せいひつ}な「地」の上に、ほんの僅かな音でも発せられると、くつきりと描かれた「図」のように、鮮明に耳朶を

打つ。ヨーロッパ中世の生活環境を想像してみると、木柵や木々の梢を渡る風の音、畔道^dをゆく荷馬車の音、水車や風車がカタコト回る音、農家で飼われている豚や牛の鳴き声と森のなかから不気味に響く狼の遠吠え……こうした音声^eがヒンバンに聞こえていたのではないだろうか。また都市では、石畳道を行き交う人の足音、呼び売りの声、職人の工房での鑿^{のみ}と槌^{つち}の音……。

だが、これらいわば環境音(特定の社会でたえず聞こえており、他の音の背景になるような音)のほかに、ヨーロッパでは中世から近代にかけて、信号音、すなわち特定のメッセージを送るための音を出す手段が非常に発達していた。主要な音源には二種類あった。ひとつは叩いて鳴らすもの、とくに鐘と鈴である。もうひとつは、息を吹き入れて鳴らすラッパ類である。これら鐘とラッパに代表される楽器こそ、「音のヨーロッパ」の代表選手としてかつてのヨーロッパ世界に不断に響き渡り、祭りの喜びに華やかな音を添え、宗教儀礼では敬虔^fな雰囲気演出し、火事や敵の来襲などの危険を告げ、儀式や法行為の開始を告知し、あるいは修道生活を律したり戦闘参加者を鼓舞したりするのに必要欠くべからざる道具であった。

それぞれの地域・時代において、それらの信号音は言語を参照系とするコミュニケーション・システムとしてコード化・慣習化されながら、子供が物心つく頃には生活上のもっとも重要なメッセージと感じられるようになるのであり、その「音の文法」の理解は、市民ないし村民として、

D

キリスト教徒や修道士や戦士として、必須の条件ともなっていた。

かつては君主や都市当局あるいは教会などの聖俗の権力者が、こうした信号音を発する権限を独占し、その有無を言わせぬ命令として、公衆に向けて上から下に一方的に鳴らされるのが通例であった。だが、その権力と結びついた垂直的な音^②の使用を逆手にとって、叛徒が鐘を鳴らして反乱の狼煙を上げたり、若者たちが鍋釜を叩いて非公式の制裁(シャリヴァリ)を加えたりと、音の権力秩序を変更する場面もときにはあった。さらには、貴族たちの間で狩猟の合図に使われた一種のモールス信号としての角笛の音、農民層の連帯感を醸成する太鼓の音、あるいは羊飼いの田舎娘への思いを乗せた笛の音などは、日常の舞台で個人的・相互的な関係を結び補強する水平的な音^③のやりとりだと看做^{みな}されよう。

いずれにせよこれらの信号音は、そのときどきの時間・空間観念と不可分で、支配・被支配関係や社会的結合関係を制定す

る特別な力を備えた音なのであり、それは音の非物質性から魂を連想し、霊的なイメージ^gを紡ぎ上げた中世人にとつてだけではなく、近代においてもこの音の力への信仰は生きつづけていた。

ローマ・カトリックの教会堂、とりわけカテドラルを建設するに当たっては、視覚的に神への礼賛を表す装飾、彫刻や画像をふんだんに盛り込むよう計画されただけでなく、音の奥深い反響にも意を用いたとされる。そして聖歌隊の声、そしてオルガンの音が、堂内に集まって祈りを捧げる信徒ら全体を分厚く包み込み、彼らを一体化させるとともに、音・声を介して一人一人を神と結びつけたのである。しかしだからこそ、たとえばイギリスのピューリタン革命においては、「神の礼拝の妨げとなる」として、全国の教会でつぎつぎとオルガンが破壊され、聖歌隊も解散されてしまったのだろう。

鐘やラッパなどの楽器から出される「音」だけが、特別な意味を帯びてヨーロッパ人に受け容れられたのではない。じつは前近代ヨーロッパでは、人間の「声」も、^④典礼や法手続きにおける不可欠の要素としてコード化されていた。また戦場での闘^{とぎ}い声、修道院での呪いの声、犯罪人に貼り付いて離れない告発の叫び、触れ役による権力者の命令の下達、呼び売りの声、さらには激しい祈り声や悪魔憑きの咆哮、恍惚境の中での聖女の叫びなど、じつにさまざまな場面において、声は人知を越えた超自然的ないし魔術的な力を発揮したのである。

こうした声の聖性ないし魔術性への信仰は、なぜ生まれたのだろうか。それは、文字にもとづかない声の文化が優勢だった時代には、声に出された言葉が、まさに肉体から、力を備えた音として発出し、いわば物理的に触知しうるモノとして、その影響を人々に直接及ぼし、そこに偉大な力が宿っていると実感されたからだろう。それは、そのリズムと音で人々を高揚させ興奮に導き、群れなす身体を同調させ、とりわけ集団の行いへと動員する。声がいくつかの楽器とならんで、教会での儀式の構成要素となるのは^h必定であつた。ミサや秘蹟執行において、あるいは戴冠式において、決まった短い言葉を実際に声に出して叫ぶことによって、はじめて儀式はⁱ正当にカンスイされると考えられたのである。

文学作品も、声による伝達が主流だったときには、その声の不可思議な力の影響を免れない。たとえばヨーロッパのロマネスク期における武勲詩やトゥルバドゥールの抒情詩は、たとえ文字に書かれることがあつたとしても、演者（ジョン・グール）

による、聴衆を前にしての声と身振りを駆使した芸によって伝えられ、そして声にされた言述は、つねに開かれた姿(構造)を持つていた。決まり文句や韻が助けになって、物語の流れがはつきり記憶されるが、テキストはつねに仮のもの、生成途中のものであつて、歌い朗誦する演者の声のみが、その都度その場で、それに価値と権威を与えたのである。物語や詩の構造を守つてさえいれば、即興的要素も排除されない。^⑤文字化された中世の文学作品にヴァリアントが無数にあるのは、こうした理由からである。

音と声の歴史学は、まだほとんど未開拓であり、ヨウヨウたる前途が広がっている。消えてしまった音と声を蘇らせることができたなら、どこまで書き連ねても平面的な文字の連続からは見えてこない、立体的な歴史像が私たちの前に立ち現れるにちがいない。

(池上俊二「音と声から立ち現れる新たな歴史像」による)

【注】 ○コード化——情報をやりとりする記号として体系化、規則化すること。

○秘蹟——キリスト教で神の恩寵を信徒に与える儀式。

○トゥルバドゥール——各地を遍歴した中世フランスの歌唱する詩人。

○テキスト——文学作品の文章。

○ヴァリアント——一つの作品でありながら、部分的に異なる表現をもつ本。

問一 傍線部 a・j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 空欄 A・D に入れるのに最適な語を、次のア・オから選び、記号で答えよ。ただし、それぞれの記号は一度のみ用いることができる。

ア だから イ しかし ウ しかも エ あるいは オ さて

問三 傍線部①について、筆者が「奮勇」と表現する理由を、本文に即して一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部②「垂直的な音」と傍線部③「水平的な音」について、その対比に留意しながら、本文に即して一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問五 傍線部④について、なぜ人間の「声」が「典礼や法手続きにおける不可欠の要素」とされていたのか、本文に即して一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問六 傍線部⑤「文字化された中世の文学作品にヴァリアントが無数にある」のはなぜか、本文に即して九〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、『太平記』の一節である。後醍醐天皇とその皇子、側近たちは鎌倉幕府によつて捕えられ、処罰が決定する。これを読んで、後の問に答えよ。

第九宮をば、いまだ御幼稚に渡らせ給へばとて、中御門中納言宣明卿に預けられて、いまだ都にぞおはしける。この宮、今年には八歳にならせ給ひけるが、御心さかさかしくて、常の人よりけなげに渡らせ給ひしが、宣明卿を召されて、「まことやらむ、主上は人も通はぬ隠岐国とかやへ流され給ふなる。さもあらば、我一人都に残りとどまりても何かはせむ。あはれ我をも、君のおはさむ国の辺りへ流し遣はせかし。せめてはよそながら、御行く末をなりとも承らむ。これにつけても、君の押し籠められて、いまだ御座なる白河は、これより近き所とこそ聞くに、御座のほども、など宣明は我を連れて御所へは参らぬぞ。」^①昼こそあらめ、夜に紛れては何か苦しかるべきと、仰せ出だされければ、宣明卿涙を抑へて、しばらくは物も申し得ざりけるが、ややあつて、皇居ほど近き由を申さば、日夜御参あらむと、責め仰せられれば、御いたはしきと思ひければ、「さん候ふ、主上のおはす白河は、ほど近き所にてだに候はば、朝夕御供つかうまつるべく候へども、かの白河と申す所は、都より数百里を経て下る道にて候ふ。その支証には、能因法師が歌にも、

(A) 都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関

と、詠み候ふなり。この歌をもつて、道の遠きほど、人を通さぬ関ありとは、思し召し知らせ給ひ候へ」と申したりければ、宮つづくくと聞こし召し、御涙を押し拭はせ給ひて、仰せありけるは、「うたての宣明やな。我を具足して参らじと思ふゆゑに、かやうには申すか。かの古曾部能因が、白河の関と詠みたりしは、まったく洛陽渭川の白河にはあらず。これは東関奥州の名所なり。それをいかにといふに、近頃、津守国夏がこれを本歌にて、

白河の関まで行かぬ東路も日数経ぬれば秋風ぞ吹く

と詠めり。また、最勝寺の懸かりの桜の枯れたりしを、植ゑかふるとて、雅経朝臣が、

(B) 馴れ馴れて見しは名残の春ぞともしら河の花の下影

と詠めり。これ皆、名は同じうして所はかはれる証歌なり。よしや、今は心に籠めて、思ふとも言ひ出ださじ」と、宣明を恨み仰せられて、その後はかき絶え、恋しやとだにも仰せ出だされず。常に御涙を押し拭はせ給ひて、うちしほれ、中門に立たせ給ひたりける折節、遠寺の入相のかすかに聞こえけるを、物哀れに思し召しけるにや、

つくづくと思ひ暮らして入相の鐘を聞くにも君ぞ恋しき

と、情中に動き、言葉外にあらはるる御歌の、幼な幼なしき、なかなか哀れに聞こえしかば、この頃京中の僧俗、男女おしなべて畳紙の端、扇の裏に書き付けて、これこそ八歳の宮の御歌とて、翫ばぬ者もなかりけり。まことに貴きも賤しきも、親子のむつびほど哀れに悲しきことはあらじと、皆袖をぞ濡らしける。

【注】

○主上——後醍醐天皇。第九宮の父帝。

○支証——証拠。

○能因——平安時代後期の歌人。

○古曾

部——摂津国の地名。能因が住んだ。

○洛陽——中国の周・後漢などの首都。転じて、平安京の左京(東の京)を

いう。○渭川——洛陽を流れる川。

○津守国夏——南北朝時代の歌人、神官。

○最勝寺——京都市左京

区岡崎にあった寺。

○懸かり——蹴鞠を行う庭。また、その周囲に植えた木。

○雅経——藤原(飛鳥井)雅

経。平安末期、鎌倉初期の歌人。蹴鞠の名人としても有名。

○中門——寝殿と表門の間にある門。

○入

相——次の「入相の鐘」に同じ。夕暮れ時に突く鐘。

○情中に動き、言葉外にあらはるる——心が動くと、おのず

とそれが言葉となつて外にあらわれ、詩歌となる。『詩経』大序による。

○畳紙——折り畳んで懷中に入れ、鼻紙

や歌の詠草に用いた。

問一 傍線部ア・イについて、どのような点が「御心さかさかしくて」「幼な幼なしさ」であるのか、それぞれ本文全体の内容に即して説明せよ。

問二 傍線部①・②について、ことばを補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 (A)(B)の和歌について、ことばを補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問四 『太平記』と同じく軍記物語に属する作品を、三つ挙げよ。作品名は漢字で記すこと。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の關係で送り仮名を省いた部分がある。

伊尹いゐん去ハ夏リ入レ殷ニ。田饒でんぜう去ハ魯リ適ケリ燕ニ。介子推けいし推ハ去リ晋ヲ入レ山ニ。

田饒ハ事ニ魯ニ哀公ニ而レ不レ見レ察セ。田饒ハ謂ヒテ哀公ニ曰ハク、臣ハ将レ去レ君ヲ。黄鹄

挙セントスト矣ハ。哀公ハク曰ハク、何ニ謂ヒト也ハ。曰ハク、君ハ独リ不レ見レ夫カノ鷄ヲ乎ハ。首かうベニ戴ク冠ヲ者ハ文也。

足ニ搏ツ距ク者ハ武也。敵リテ在ニ前ニ敢マ闘フ者ハ勇也。得テ食ヲ相グ告ル仁也。守リテ夜ヲ不レ

失ハ時ヲ信也。鷄ニ有ルモ此ノ五德ハ。君ハ猶ホ日ニ澮ニ而レ食フ之ヲ者ハ何也。則ニ以テ其ノ所ニ從リテ

来ル者ハ近キ也。夫ノ黄鹄ハ一挙ニ千里ニシテ止マリ君園池ニ食ヒ君魚鼈ガギよ啄つ其ハ黍梁しよりやう。

無ケレドモ此五者、君猶ホ貴フ之ヲ、以テ其ノ所ニ從リテ来ル者ハ遠キ矣。臣ハ将レ去レ君ヲ。黄鹄

挙セントスト矣ハ。哀公ハク曰ハク、止メヨ。吾ハ将レ書ニ子言ヲ也。田饒ハク曰ハク、臣ハ聞ク食フ其ノ食ヲ者ハ不レ

毀こ其ノ器ヲ。陰い其ノ樹ニ者ハ不レ折ラ其ノ枝ヲ。有リテ臣ハ不レ用ヒ何ゾ書シ其ノ言ヲ。遂ニ去リ之ヲ燕ニ。

燕立^{テテ}以為^ス相^ト。三年^{ニシテ}燕政^ノ大平^{イニギ}、国^ニ無^シ盜賊[。]哀公喟^き然^{ぜんトシテ}太息^シ、為^ニ之^ガ

辟^{さクルコト}寝^ラ三月、減^{シテ}損^上服^{ハク}曰⁶、不^{シテ}慎^マ其前^ノ而悔^ユ其後^ノ何^ソ可^ニ復得^タ。

(『韓詩外伝』による)

【注】 ○伊尹、田饒、介子推、哀公——人名。 ○夏、殷、魯、燕、晋——国名。 ○察——人の才能を見抜くこと。

○黄鹄——黄色の大鳥。ここでは優れた才知を持つ者の喩え。 ○搏——打撃すること。 ○距——鶏の爪。

○淪——煮ること。 ○魚鼈——魚やすつばん。 ○黍粱——きびやあわ。 ○喟然——ため息をつくさま。

○辟寝——安穩と眠るのを慎むこと。 ○減損上服——上等で贅沢な服装をやめること。

問一 波線部 a「敢」b「相」c「則」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「臣將^レ去^レ君」を、書き下し文にせよ。

問三 傍線部 2「何謂也」3「君独不^レ見^ニ夫鷄^ニ乎」を、現代語訳せよ。

問四 傍線部 4「此五徳」とは何を指すか。簡潔に答えよ。

問五 傍線部 5「黄鹄拳矣」とはどういうことか。説明せよ。

問六 傍線部 6「不^レ慎^ニ其前[。]而悔^ニ其後[。]何可^ニ復得[。]」と哀公が言ったのはなぜか。一五〇字以内で述べよ。